
姫と従者な関係

GARU

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫と従者な関係

【Nコード】

N0238D

【作者名】

GARU

【あらすじ】

これは『姫』に振り回されるごく普通な高校生の日常の一幕

艶やかな髪。

鋭くまた愛らしさも魅せる瞳。

しなやかなその肢体からはどこか特別な血筋…気品さえも感じさせる。

そんな…多くの目を集めて止まない『姫』と呼ばれる彼女。

彼女こそこの凡庸な高校の中で多くの者たちが認め認識する特別であつた。

文化祭も二週間前となり皆にもようやくエンジンが掛かり始めた最中。

「すまんっウチの一年が『姫』を怒らせやがつた」

顔馴染みな友人からの最近良く聴くお決まりな一言。

「はあつまたかよ！つい三日前にもやらかしたばっかじゃねえか」
言葉通り、ついこの前一悶着やったばかりだというのに…

反省という言葉を知らんのか。

「ふっコレも我が部の伝統。こんな所で途絶えさせる訳にはいかんだろっ」

「まったく会場の設置に追加でまた部員何人かもらつてくからなっ。
写真部部长さん！」

「…了解、料理部部长さん」

コレもまた最近の決まり文句。

哀しいかな、我が料理部には男手が足りてないのだ。

「まったく、何でもまたこう毎回忙しい時に限って」

公然と人手が徴収できるのはいいが、流石にボクばかり苦勞す

るなんて普通にイヤだ。

かといって校内で『姫』を何とかできるのは…

………はあゝ

「で、場所はどこ？この時間帯なら…屋上？」

「イヤ校内を逃げ回ってる」

時間もない事だし直球で終わらせたいボクの心情をバツサリ裏切ってくれる素敵回答。

しかし…

「逃げてるって凄いなソイツ。なんだよホントに文化部員か？」

直前までの心情すら忘れて、ソコは素で感心。

生まれもつてな狩人だったりする『姫』。

普通現役運動部な連中だってそう簡単には逃げられない。

そんな姫から1人で逃げ続けられているという。

「中学ん時は陸上で長距離走ってたって、あっあと趣味はサバゲーらしい」

「なっ！？なんでんな奴がお前んトコに」

サバゲー…サバイバルゲームとかっていうヤツかな？

確か山の中とかでやる戦争ごっこ？

みたいな感じだっけか？

「将来の夢は戦場カメラマンだそうだ」

「なっ………なんつーかまた…」

「ふっウチの秘密兵器さっ」

何故か誇らしげなバカ1人。

コイツもそうだが、まともな部員は居ないのか？

…っっていうかまさかわざと？

わざと『姫』を怒らせた？

いや…いやいや流石にソレは…あはっあはは…

「何か体育館の方が騒がしいな…とりあえず行ってみるか？」

「…あぁっあぁそうだな」

まあともかく、今は何も考えないでおこう。

うんソレが良い。

今はさつさと『姫』を抑えて労働力確保つ。

つかそういえば今日はボク自身既に時間切羽詰ってるんだつた。

生徒会に提出する書類。

提出期限が…はあゝ。

と、まあ軽く現状を悲観してた所前方から飛び出してきた影一人。

「あつ部長」

ボク達に気付いての一言と、振り回されてるカメラを見て正体確信。

その背後、まだ姿は見えないがすぐソコにはきつと…

「来るぞッ！！」

「了解ッ！」

思考を一気に戦闘態勢に。

教室に常備させている『ソレ』にいつもの『粉末』を仕込んで準備完了。

後は『姫』が現れれば…

………

………

…

サバーゲーな後輩君と接触。

問答無用で確保。

…

…

そして…

…

「ヒッてーっ」

窓から飛び込んできたアクロバティックな強襲者の一撃に後輩君の悲鳴が響く。

予想外な方向からの襲撃に場は一瞬硬直。

しかしながら例外はどこにでも居る。

『姫』との付き合いの長さは伊達じゃない！

ターゲットに襲い掛かるのに夢中な【姫】

『対姫捕獲用麻袋』を頭からスッポリ。

即座に口を閉じてそのまま押さえ込む。

途端に暴れ始めた『姫』。

暴れる。暴れる。

それはもういつも通り凄い勢いで。

叫び。

爪を立て。

身を跳ねさせて。

ボクだって負けず劣らず必死で押さえ込む。

暴れる。暴れる。

『姫』必死。

ボクだって必死。

だってココで失敗したら次の標的は間違いなくボクな訳だし。

そりや必死にもなりますって。

…そして…

…長い様で短かったかもな時間。

ようやく『姫』の抵抗がなくなった。

強く握り締めてた麻袋の口を開けると、案の定中には酩酊状態な『姫』。

「ふーっ」

ココでようやく安堵の溜息。

脇ではアイツに怒られてる後輩君。

『姫』相手に引つ掻き傷一つというのはなかなか。

幸運だったのか…

後輩君の実力だったのか…

まっボクには関係ないか。

「んじゃ『姫』は連れてくから」

幸せそうにだれているしてる『姫』を腕の中に抱えて。

「約束忘れんなよー」

更に一言残して部屋に向かう。

「まったく… 大方昼寝の邪魔されたか何かだと思っけど人騒がせな

…」

軽く喉元を掻いてやるとゴロゴロと気持ち良さそうに喉を鳴らす。

「いつか保健所送りにされても知らないから」

言って軽くコツいてやるが、コレもまあいつもの事。

「マタビ粉もそろそろ追加しとかなきゃいけないし、やる事いっ

ぱいっ」

分かってるのか。

分かってないな。

「本当に困ったお姫様だよキミは」

そんな『姫様』は甘える様に…

ただ今という時が至福だというかの様に…

「にゃ」

ボクの腕の中で嬉しそうに一声鳴いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0238d/>

姫と従者な関係

2010年10月9日21時38分発行